

1. 研究活動

<p>学会発表「日本語のモダリティ：階層下降か文法的比喩か」</p>	<p>2011. 10. 8</p>	<p>日本機能言語学会 (JASFL) 第 19 回秋期大会</p>	<p>日本語のテキストでモダリティ表現が用いられた場合、特に関係過程節を利用してモダリティが表わされた場合（例：[[彼は遅刻してくる]]ことがある）の分析法を論じたもの。「ことがある」が階層下降して動詞群（述部）の一部となると考えるか、「ある」が独立して述部を成すと考えるか、どちらの分析法をとるかによって、述部がどこか、節の過程型が何か違ってくるため、分析に大きな影響を与える。こうした例をどう分析すべきか、またその判断基準は何かを、いくつかの文法テストを提案しながら論じた。</p>
<p>論文「機能文法における節境界の問題と認定基準の提案」（佐野大樹、水澤祐美子、伊藤紀子との共著）</p>	<p>2011. 4</p>	<p>『機能言語学研究』第 6 巻 P17-58</p>	<p>日本語テキストをどのような基準や指標を基に節区分するかについて、厳密な基準を確立するのが目的。日本語の節境界認定に問題が生じる可能性があるのは、i) 述語として機能すべき動詞・形容詞・名詞群が明示されていない場合、ii) 動詞・形容詞が述部以外の機能を担っているようにみえる場合、iii) 動詞群・形容詞群が動詞群・形容詞群複合の一部として機能しているようにみえる場合、iv) 名詞が接続詞類と同じように機能しているように見える場合である。本稿は、これらの実例を示すとともに、どこに節境界を設けるかの具体的判断基準を提案した。</p>
<p>論文「日本語の CIRCUMSTANCE System について」</p>	<p>2011. 10</p>	<p>Proceedings of JASFL. Vol. 5: P11-23</p>	<p>日本語テキストを過程構成の側面から分析しようとした場合の、状況要素に焦点を当てて論じた。 日本語では、状況要素を具現する文法要素が、名詞群、後置詞句、形容詞群、副詞群、動詞群など多岐にわたると考えられるが、これらの要素は、参与要素、あるいは節との境界があいまいなことが多い。そのため、状況要素と参与要素・節の違いを整理することで、状況要素を具現する文法要素を明確にし、日本語の状況要素選択システムの一案を提案した。</p>
<p>論文「日本語のモダリティ：「主観的」表現と「客観的」表現</p>	<p>2012. 3. 30</p>	<p>名古屋芸術大学研究紀要 第 33 巻</p>	<p>機能言語学の一派である選択体系機能理論 (Systemic Functional Theory) の理論枠組みに基づき、日本語のモダリティ表現を、意味や機能からカテゴリー化すること、特に「主観性 (Subjectivity)」の観点から体系的に分類することを試みた。主観性とは、蓋然性や頻度、義務性など、モダリティにまつわる判断を「誰が下したか」を表わすシステムである。また、この分類に基づいて 1 つの論説をテキスト分析することで、筆者が、さまざまなモダリティ表現を巧みに利用することで、自分の主張を「客観的に正しい」ものとして構築しているさまを例示した。</p>

## 2. 教育活動 (教育実践上の主な業績)

大学院授業担当 有 無

授業科目 英語1 (初級)	
◆前期 ◆後期	
工夫の概要	教材・資料等の概要
「初級」「中級」に分けることで、より学生の英語力に合った授業を展開できるよう工夫した。「英語1 (初級)」では、中・高までに勉強した英文法を1から復習し、大学レベルの授業への橋渡しを行う事をこころがけた。毎回小テストを行うことで、学生が学習内容をこまめに復習して身につけられるよう工夫した。	授業は英語の絵本を講読する形式。毎回、絵本本文をプリントにして配布した。プリントには、学生が自分で予習してきた訳を書き込むスペースや、板書事項をメモする部分なども設け、教材としての利便性を図るとともに自主的な学習を促した。
授業科目 英語2 (初級)	
◆前期 ◆後期	
工夫の概要	教材・資料等の概要
「初級」「中級」に分けることで、より学生の英語力に合った授業を展開できるよう工夫した。「英語2 (初級)」では、中・高までに勉強した英文法を1から復習し、大学レベルの授業への橋渡しを行う事をこころがけた。毎回小テストを行うことで、学生が学習内容をこまめに復習して身につけられるよう工夫した。	授業は英語の絵本を講読、かつ部分的に和文英訳する形式。毎回、絵本本文をプリントにして配布した。プリントには、学生が自分で予習してきた訳を書き込むスペースや、板書事項をメモする部分なども設け、教材としての利便性を図るとともに自主的な学習を促した。
授業科目 英語3	
◆前期 ◆後期	
工夫の概要	教材・資料等の概要
「『アリス』の英語とことば遊び」という副題のもと、言語芸術としての「ことば遊び」を取り上げた。学期前半は教員がさまざまなことば遊びを紹介し、後半は、学生自身が英語のことば遊びを見つけて発表する、という形式をとり、学生の自発的な学習やプレゼンテーション能力の向上を目指した。	講読テキストは「不思議の国のアリス」「鏡の国のアリス」からことば遊びが使われている部分を抜粋してプリントにし配布した。プリントには、学生が自分で予習してきた訳を書き込むスペースや、板書事項をメモする部分なども設け、教材としての利便性を図るとともに自主的な学習を促した。プリントは毎回回収して採点した。

## 3. 学会等および社会における主な活動

日本機能言語学会 (JASFL)	2000. 4～現在	学会発表・学会誌への投稿
------------------	------------	--------------